第十一章　祭事と民俗芸能

第一節　富倉のヒャット

富倉神社の由来

富倉神社には、『信濃宝鑑』によると、遠く坂上田村麻呂が北国征伐時代に祈願したとされ、正保年間（一六四四～一六四七）には諏訪様をご神体とした神社である。

ヒャットの起源については文献等確たる証拠がないので定かではないが、伝承等をたどるとおおよそ次のように受け継がれている。

越後高田の城主上杉謙信の家来山下采女正守が、謙信が武田信玄の信越攻略を防ぐために飯山城を築城すると同時に、高田城との連絡を計るため富倉小井土峯にのろし上城を築城し、武将を連れて駐在していた。謙信公は、飯山城へ入城のため富倉街道通過の際は必ず富倉神社へ寄願参拝されたといわれる。この奉納されているヒャットは、山下采女正守の武将が鍛錬した武術の基本動作であるといわれている。

富倉には、昔から中谷には富倉神社、倉本には倉本神社、滝ノ脇には富滝神社、濁池には伊勢神社の四社があって、山下の武将たちが戦勝を寄願しに四社に武術を奉納されたという。

今から六〇年ほど前までは四集落で毎年秋祭りに豊作を願ってヒャットを奉納したが、戦後集落ごとの秋祭りが統合されて富倉神社祭礼として一本化し、ヒャットの奉納となった。

「ヒャット」の意味は、刀舞いのかけ声の時に「ヒャット、エー」というかけ声をかけるところから出た名である。

こういう言い伝えもある。上杉謙信の養子、景勝の頃の時代に倉本のヒャットがあったのではないか。景勝が会津へ行くとき舞の形を残し、広まっていったのではないかと。百姓、兵隊もいて、いつ何時も練習したり親善試合をしたりしていた。そのうちに、一般の人も入ってやるようになった。それが芸能として残ってきたと考えられている。

富倉の城主も会津に一緒に行った。その時の家来丸山一之進の遺留品の中に刀があったが、それが滝ノ脇の刀といわれている。

祭り時の神撰

献上品として、海の品（鱒）、山の品（大根）、酒、米、献燈、昇旗（大旗・小旗）が祭りに献上される。そのうち米は、毎年献上しようとする人がいて、早めに早稲種を植えて、「オラのできたから飾っとくれ」と献上している。

ススキ灯籠

花灯籠、傘灯籠、すすき灯籠等で豊作を祝うと同時に祭りの華やかさを演出する。灯籠を作るのは女衆だったという。現在、灯籠作りは九月一四日の午前中にお宮で作っている（図1）。

① 番傘大
② 丸チョウチン３箇さげる
③ 腰巻赤布　巾 36cm 約
④ ヒシ　厚約 30cm　２面
　１面毎に奉納と書く
⑤ 燈籠骨台　直径 1.2 m外輪
　50cm 内輪
　外輪に 48 コのススキ骨を巻く印を付ける
　内輪に 48 コの穴をあけるさし込む穴
⑥ マンド　縦 70cm　横 50cm 位の四角
　１面に豊年萬作、五穀豊穣、富倉神社、御祭礼と書く
⑦ ススキ骨　トーロー１本に竹骨 48 本
　１本の長さ 3.5m　太さ 1.2cm 位
　台にさし込む所 50cm を離して巾 3cm に切った金、又銀の紙を巻く。
⑧ トーロー竿、大竹　長さ５m位
⑨ トーローは一対として献納されるので
　１本は金巻き、１本は銀巻き
⑩ 金紙、銀紙が高価なので豊作でなければ献燈されない
⑪ トーローには花トーロー、傘トーロー、ススキトーローの３種類
⑫ 花、傘トーローは毎年献納される

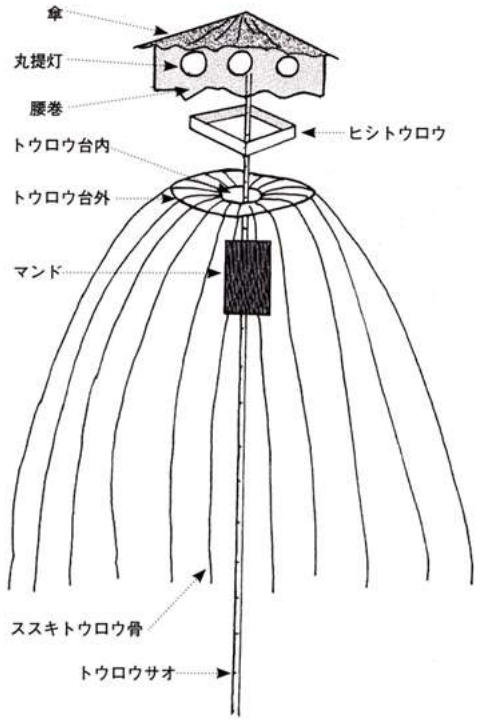

図１　ススキ灯籠

ヒャットの手順と定め

富倉のヒャットは、九月一四日の秋祭りに富倉地区中谷の富倉神社で行われる（写真１）。

最初に二人で切り合う「悪魔払い」が舞われる。「ヤジ馬（悪者）」を白装束の凛々（りり）しい「悪魔（正義の味方）」が追い払う。

続いて三人で切り合う「居合い抜き」の舞が始まる。二人の悪魔が登場し、刀の切り合いをし合う。そこへまた、「ヤジ馬」が加わり、一段と勇壮な切り合いとなる。腰が低く素早い動作で、相手の眉間をめがけて「ヒャット」と気合いを掛けて打ち込み、相手はこれを刀で受け止めるために火花が散る。怪我（けが）はしょっちゅうというから、舞う方も真剣だが、見る方もアッと息をのむ緊張した瞬間が続く。囃子（はやし）の太鼓も笛も最高潮になり、最後に「ヤジ馬」が負けて退散する。

昔の戦闘は一人ひとりの戦いであり、他人の加勢は卑怯者

写真１　ヒャット

といわれる。このヒャットの「ヤジ馬」は、結局卑怯を恥じて刀を捨て、逃げる動作をする。このことからも、悪魔を退治する意味がこの舞の本旨であることが分かる。また、賊や病を退治する意味もあるという。

秋祭りの日程は、おおよそ次のようになっている。

① 活性化センター出発　夜八時
② 道中を練り歩く
③ 鳥居で「しめ切り」
④ 道中を練り歩く
⑤ 中谷の石段を上がる
⑥ お宮の庭で「しめ切り」

写真２　なぎなた

「ヒャット」（悪魔払い・居合い抜き）、「なぎなた」（写真２）

⑦ 一一時頃終わる。

祭りが統合されるまでは、祭りの日が倉本は八月二六日、滝ノ脇は九月一一日、濁池は九月一四日、中谷は九月一七日と違っていたため、他部落の人たちが氏子の庭に立てられた灯籠を夜宮の時、先陣争いをしてお宮へ担ぎ上げたという。

ヒャットには、次のような細かな定まりがある。

① ヒャットをするものは武将たる顔とする。
② 衣装は、かすり浴衣、黒脚絆、白手甲、白鉢巻、紅白のたすき掛け、わらじ履とし、帯刀は真刀とする。
③ 勢いを鼓舞するために、大太鼓、小太鼓、笛を吹く。

化粧と道具

悪魔（正義の味方）の化粧は、ヤジ馬を切り倒し、人々の幸せや豊作を望んで舞うのにふさわしいものになる。その化粧はすっきりとしていて、鼻筋を通してひげをピーンとかく。強そうに、いい男だという感じにする（写真３）。

ヤジ馬の化粧は、ことあるものを遠巻きにして好き勝手にののしったり、邪魔したりする雰囲気を出すものになる。その化粧は複雑で、ひげがうずを巻くように太々とかく。鼻筋は通す。

写真３　悪魔の化粧

写真４　チャンギリ

笛、太鼓の間に囃子を入れる。「悪魔払い」の時はソーレと、かけ声を入れ、「居合抜き」の時はヨーイ、チョイという。さらに、「なぎなた」の時はチョイと、それぞれに違った囃子を入れる。

昭和四〇年頃までは、チャンギリという道具を使って囃子を入れていた（写真4）。

ヒャットでは、二尺三寸の真剣を使う。大太鼓、小太鼓、笛が主な道具である（写真6）。笛は、先にいくにつれて穴の間隔が狭くなる独特のものを使用している。

中谷の真剣は軍隊で使ったという本物である。倉本の真剣は剣舞用（本造り）である。いずれも教育委員会の使用許可がいる（写真5）。

写真5　居合い抜きで使う真剣

写真6　笛と太鼓

写真7　布施田神社の祭礼

後継者と獅子舞

後継者不足で、平成一三年からヒャットができない状況になっている。しかし、人々はみんなヒャットを残すことを願っている。残すにはどうすればいいかという本格的な話し合いをしなければならないと地区の人々はいっている。

また、現在は中断しているが、平成五年頃までは祭りの最後に獅子舞が行われ、雄獅子と女獅子がある。ここの獅子舞は、小境のものとつながりがあるといわれている（写真8・9）。

なお、北峠集落は昭和の頃、柳原、外様へ集団移転し、北峠で行われていたヒャットは、布施田神社の祭礼に取り入れ

られて現在も継承されている（写真7）。

秋祭りの料理

祭りの料理には手作りのそばがなくてはならない。山ごぼうの葉の繊維をつなぎに使う富倉独特のもので、こしがある。笹寿司も祭りに欠かせないものである。具には、こごみ、ぜんまい、味噌漬け（三年間漬けた物）などが使われている。そのほか、赤飯、こんにゃく、豆腐、天ぷらなど手作りの料理が作られる。

昔は、料理の準備はもっぱら女衆で、祭りをゆっくり見られなかったという。丸々三日間休みなしで準備をしたり、赤飯の入った重箱を一度に六個ぐらいずつしょって運んで配って歩いた。赤飯は夜中の三時、四時から炊き出しを始めた。

写真8　獅子頭

写真9　中断前の獅子舞

ヒャットを見られればいい方だった。そんな女衆にとって、他部落の祭りに呼ばれて行くのが唯一の楽しみだった。

第二節　大川神社の祭り

祭り時の神撰

御神酒、米、塩、魚（鮭か鱒）一本、野菜（大根、人参、とまと、なす）、昆布、菓子、果物（りんごやみかんなどの時期にあったもの）を献上している。昔は、籾や布なども献上していた。

花灯籠

花灯籠が二本立つ。昔は四本立った。ヒバタ、赤旗も立つ。カサボコ（灯籠を小さくしたもの）も立つ。昔は、凶作の時は、アゲドウロウといって初めからお宮に立てていた。ヒバタには、大川神社、五穀豊穣、天下太平の文字が書かれている。ヒバタを持つ人は、その年その年で決めている。祭りの当日、鳥居をくぐった花灯籠が、村人たちの手で四二段の石段をかけ上がる様は壮観である。一気にかけ上がり

写真10　石段をかけ上がる灯籠

拝殿の横に立てられる（写真10）。

花灯籠は、昔、資材の少ない頃は古雑誌や新聞紙を使って作っていた。現在は、写真のような和紙を赤と青で染めた「花」と呼ばれるものを使っている。今も夜集まってみんなで作る。六組の地区が様々な作業を分担して作り上げる。昔は、お祝いの歌や流行っていた歌を歌いなど、にぎやかにしながらゆっくりと作ったものだったという。

祭りの前日、ふれあいセンターでは花作りが行われていた。一つの花灯籠に花を付ける竹ひごが三二本、竹ひご一本に花が一四個、つまり一つの花灯籠に花が約四〇〇個。花灯籠二本で八〇〇個の花を作るのである（写真11）。二〇～三〇センチメートルの長さの「ヨリ」を作るにはコツがいる。男性一九人、女性二人が昔話や中学校時代の寄宿舎生活の話に花を咲かせながら作業をしていた。地域の人たちの心のつながりや連帯感を強く感じた。約二時間の作業であった。

写真 11　花灯籠

八〇〇個の花は赤と青に色づけられ、翌朝の灯籠作りを待つだけになった。

やはり、祭りの前日、ふれあいセンターで花作りが行われているときに、神社ではオンベやイアイの儀で使う刀作りなどが行われていた（写真12）。

昔は豊作だと灯籠をあげ、凶作だとあげなかった。だから、祭りがよけいに楽しみで、一年の一番の楽しみでもあった。

祭りの当日、朝八時から村の男衆が集まって旗ざおが立てられる。その後、花灯籠作りが始まる。枠を作り、竹ざおを縄で締め付け、前日の夜作っておいた花を付ける。ヒシ、番ガサ、コシマキ、提灯を付けて完成する。祭りの準備が整い、夜の本番を待つばかりとなる（写真13・14）。

写真 12　イアイの儀で使う刀作り

祭りの手順と定め

大川神社は諏訪社であり、鳥居には「健御名方富命（たてみなかたとみのみこと）」という祭神名が書いてある。

昔は、八月一八日に行われていたため、お盆の一三日から祭りの一八日までお祭り一色であった。しかし、昭和二六、二七年頃、勤め人が増えてきたことと、当時たばこを作っていて手の忙しい時期に五日間も遊ぶのは大変との理由から、総会を開いてお盆の一六日に行うことにした。

現在の大川神社の祭りは八月一六日の夜、盛大に行われている。おおよその流れは次のようになっている。

① ふれあいセンター出発　悪魔払い、なぎなた、イアイの儀、獅子舞

② 道中を練り歩く

③ 神社入り口の道で「しめ切り」「なぎなた」

④ 鳥居で「しめ切り」「なぎなた」「獅子舞」

⑤ 神社の境内まで上がる

⑥ 神社の境内で「しめ切り」「なぎなた」

⑦ しめを切った「悪魔払い」は石段をかけ上がる

⑧ 神社で神主によるお祓い（写真15）

⑨ 神社の拝殿で「悪魔払い」

「なぎなた（ホット）」

「イアイ（イヤイ）の儀」

「獅子舞」

悪魔払いを先頭にして、神主、御神酒徳利、ちょうちん類、氏子・役者、灯籠の順番で練り歩いていく。

現在は、ふれあいセンターから出発するが、以前は区長の家から出発した。道中、腰にぶら下げた酒を飲み交わし、歌を歌いながら神社まで練り歩いたという。練り歩く前に、ふれあいセンターで神主によるお祓いがある。そし

写真 13　旗竿立て

写真 14　灯籠の花つけ

写真 15　おはらい

て、道中を練り歩いて役者が神社に着いたところでもう一度お祓いをする。その後、拝殿で舞いが行われる。

「悪魔払い」は、一番先に神様の所に入るので、真剣で清める。このしめ切りより先には誰も入っていけない。たすきにはちまきをした役者（大人）が刀で「鬼」という文字を書いて、それを足で消してしめ切りをしていく。これには「鬼を消す」という意味がある。公会堂、鳥居、神社の三カ所で舞う（写真16）。

写真16　しめ切り

「なぎなた」は、かけ声が「ホーホー、ホット」なので、この名前（ホット）がついた。五～六年前から小学生が役者をやっているが、それまでは、大人がやっていたため、小学生がやる前まで中断していた。六種類ほどの舞いがある（写真17）。

「イアイの儀」には七～八の舞いがある。刀は木で作る。毎年、一〇本以上作る。二人の役者（中学生）が長い刀（木刀）を使って舞う（写真18）。その木刀の長さは武士のすごさを表すので、一二〇～一三〇センチメートルもあり、さやもついている。昔は、丈夫との理由から竹で刀を作った。役者も、昔は尋常小学校を卒業した二〇歳前の男の人が役者をやっていた。二〇歳を過ぎると、兵隊に行く人もいて、残った人が次の代に教えていた。

写真17　なぎなた

写真18　イアイの儀

獅子舞には、次の五種類の舞いがある。獅子頭は七〇～八〇年前から使っている。

「つるぎ」真剣を持って舞う。

「おんべ」おんべを持って舞う。

「かたな」刀を持って舞う。

「手舞い」何も持たずに、素手で舞う。

「よたん」しっぽ持ちと呼吸を合わせて舞う。

「あばれ獅子」四～五人のしっぽ持ちがよたんを大きく広げて持ち、その人たちと呼吸を合わせて獅子が

勢いよくあばれまわる。時には見ている人の寸前まで獅子頭が飛びつく。二人の男獅子の役者は大人である（写真19）。

悪魔払いやイヤイの儀の役者の化粧は、すごみを出すためにやる。筆やマジックを使って書き込む。

化粧と道具

大太鼓一人、小太鼓一人、チャンギリ二人、笛は大人と子どもが大勢で祭りを盛り上げる（写真20・21）。浴衣や帯は神楽保存会でそろえている。初めは、大川清造さんが浴衣と法被（はっぴ）を寄付してくれた。

写真19　獅子舞「刀の舞」

写真20　化粧

大川さん

大川清造氏（大川神社と大川氏との関係については第十章で詳しく述べている）の親族の方は、遠く東京から現在も毎年欠かさず祭りに参加しており、もう五〇年以上も続いている。現在の大川精一さんは、初代平左衛門さんから数えて二一代目だそうで、

「大川の人たちは、よく引き継いでいらっしゃる」

「若い人も多く、今の時代にしては素晴らしいことで、うれしいことです」

と、毎年の参加を喜んでおられた（写真22）。

写真21　笛や太鼓

写真22　今も訪れる大川さん一家

門付け

祭りの翌日には、地区内の事業主やお祝いのあった家などを獅子が舞って歩く、悪魔払いをする。これを「かどづけ」という。（写真23・24）。

子どもみこし

祭りの翌日、一七日の午前中に行なわれる。ふれあいセンターで神主さんのお祓いを受けて出発式をした後、元気にみこしを担いで地区内をまわりながら大川神社をめざす（写真25・26）。

写真 23　門づけ（店で）

写真 24　門づけ（お祝い）

写真 25　子どもみこし

写真 26　こどもみこし